HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『浜松中納言物語』末尾「涙に浮き沈み」考 : 源泉としての『源氏物語』
Author(s)	保坂, 智
Citation	国語国文研究, 152, 16-31
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89732
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_152_16-31.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『浜松中納言物語』末尾「涙に浮き沈み」考

――源泉としての『源氏物語』――

保坂　智

髪をそぎ、衣を染めて深き山に入りぬ」とあるを見るに、見し夢はかうにこそ、とおぼし合はするにも、いとどかきくらし、たましひ消ゆる心地して、涙に浮き沈み給ひけり。

（巻五・四五〇～四五一頁）[注1]

一　はじめに

『浜松中納言物語』巻五は、次のように閉じられる。

その年、もろこしより人多く渡れるよし、（中納言は）大弐の申したるをうち聞くより、胸、心さわぎまどふに、送りに来たりし宰相のもとより消息あり、あはれにいみじきことども日記にして、「去りぬる年の三月十六日に、河陽県の后、光隠れさせ給ひにしかば、天下にかなしみて、御門、位を棄てて、御髪おろして、崑崙山に入り給ひにき。東宮、位につき給ひては、一の后、世のまつりごとをし給ふ。第三の親王、東宮にゐさせ給ひぬ。一の大臣の第五のむすめ、内裏にまゐらせて后に立てむとするほどに、

この世にもあらぬ人こそ恋ひしけれ玉の簪何にかはせむ

通説ではこの場面、すなわち唐后崩御とそれに伴う帝の出家や東宮の立太子、五の君の出家等が手紙により知らされ、中納言が唐后転生の夢を確信し、涙にくれる姿で物語は終わるとされている。[注2]「作者はすべてを読者の想像に任せて筆をとどめている」[注3]とされ、近時は「ある種の文芸的達成を示すもの」[注4]と評価されており、確かに余韻を残し、読者をさまざまな想像に駆り立てる。実際、多くの論者によって、その後の展開が具体的に推論されている。[注5]

本稿では、そのような今後の物語の可能性を論じる前に、まず「涙に浮き沈み給ひけり」という本文を吟味し、この語句を表現史上に位置づけた上で物語において解釈することを目指す。というのも、

この「涙に浮き沈み」という表現が、和歌的表現であることは誰の目にも明らかであるからか、あるいは当該例より先にある類似表現に注をつけているからか、諸注釈書では特段注目されてこなかった[注6]からだ。論文では、この場面全体の表現を詳細に論じた中西健治「浜松中納言物語巻五末尾攷[注7]」が以下のようにまとめている。

「涙にうきしづみ給けり」という結びの語句には、「いとゞかきくらし」「たましゐ消ゆる」とする誇張された類型的悲嘆表現を受けて、それに重ねて歌語的な表現で締め括ることにより、より叙情的な末尾文とする意識の反映が内包されていると読みとれるのである。

また、それより早く浜松中納言物語ゼミ「『浜松中納言物語』の本質―盈満のなかの欠落―[注8]」が

「涙にうきしづ」むという表現は和歌的発想にその源があり、あやにくな恋の嘆き、といった甘美な感傷性をその底に湛えている。「浜松」においてもそのイメージが皆無とは言えないが、そこには、深刻な絶望とは言えないまでも、ある種の哀愁が漂っているのは否定できない。[注]

とし、注において「「君恋ふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞ我はなりぬる」（古今・恋二・興風）など。涙を川や淵にたとえ、流る・浮くと誇張するのは恋歌の常套表現」と述べる。傍線を付したこれらの指摘の通り、「涙に浮き沈み」は「和歌的発想」に基づく「歌語的な表現」なのだが、「叙情的な末尾文とする意識」からとするだけではこの語句が選び取られた意味が曖昧なままであろう。たとえば物語中、悲嘆にくれる表現は「涙止まらず」「涙にくれて」「涙につつまれて」「涙に沈む」「涙に浮きて」「涙におぼれて」「涙を落としかけ」など多様であった。和歌的表現を含め数あるこれらの涕泣表現ではなく、「涙に浮き沈む」である意味があったのではないか。読解の問題として言い換えるなら、「涙に浮き沈む」であることからどのような読みが可能となるのか。王朝和歌に基盤を持つ和歌的表現として、「涙に浮き沈む」の内実をふまえ考察していく。

二　「涙」に「浮き沈む」の位相

「浮き沈む」の項目を立てる辞書は少ないが、たとえば、『精選版日本国語大辞典[注9]』には「うきしづむ【浮沈】自マ四①波の動きなどにつれて、浮いたり沈んだりする。②（「浮き」と「憂き」をかけて）嘆き悲しむ。嘆き苦しむ。涙などの縁語。③（比喩的に）栄えたり衰えたりする。」（用例は省略）とある。本稿ではこの②を中心に考えることになる。まずは、『浜松中納言物語』における「浮き沈む」の例を確認しておこう。

A　四十九日などいふことも、この殿（＝中納言）、よろづにおきて給ふを、われ（＝吉野姫君）はただ涙ばかりに浮き沈むをことにて、過ぎ果てぬ。　（巻四・三一四頁）

B われ（＝中納言）こそ契りなきことに思ひわび、涙の淵に浮き沈みつつも、この人（＝吉野姫君）を見馴れなづさひつるにこそ命をかけて、つひにこの人あれば、すこしの心はなぐさめなむとするぞかしと、こよなうなぐさみて世を過ごしつれ。

（巻五・三八四頁）

C（吉野姫君）中納言も、わが心とあくがれ出でたるとや心得給へらむと思ふかたの、いみじうわびしきに、月ごろいみじう思ひくづほれ弱りたる人（＝吉野姫君）の、はかなき湯をだに見も入れず、夜昼涙ばかりに浮き沈みたるに、たましひも身に添はずあくがれ果て、かぎりのさまになり給へりしを、ふるさとに立ち帰り、見馴れし人々のなかにてなげきあつかはれ給ふに、やうやう、たましひもしづまり、心もすこしなぐさみ給ふままに、

（巻五・四二七頁）

D（中納言）見し夢はかうにこそ、とおぼし合はするにも、いとどかきくらし、たましひ消ゆる心地して、涙に浮き沈み給ひけり。

（巻五・四五一頁）

当該例Dを含めて全四例ある。うち中納言に対してはBDの二例、吉野姫君に対してはACの二例があり、巻四の後半から集中して使用されており、物語終盤の鍵語であるのがわかる。また、BCは、点線を施しておいたように直後の「見馴れ」に「水馴れ」をかける表現意識が共通しており、CとDでは「たましひ」[注10]の語が共通している。

諸注釈ではとくに注がつかない[注11]が、吉野姫君についてのACから検討したい。Aは尼君死後四十九日が経とうとしているのに、相変わらず涙にくれている様子を表したものであり、Cは式部卿の宮に連れ去られ一層体調を悪化させていた姫君が悲嘆にくれるさまを、快復しつつある時点から回想的に描写したものである。悲嘆にくれていたその時には、以下のようにあった。

E（吉野姫君は中納言が）この日ごろに、亡くやなり給ひぬらむと、いと心をさなく、のたまひしさまを、ひとへにあはれにいみじう思ひ出づるに、つゆも湯などやうのものをだに見も入れ給はず、思ひ沈むに、水の沫などのやうに消え入りぬべきを、

（巻五・四〇五頁）

自分の不在を嘆いた中納言が死んでしまうのではないかと予想し、中納言を思い出しながら「思ひ沈む」さまが描かれており、Cでは中納言に自ら出て行ったと思われるつらさから「涙ばかりに浮き沈み」と変わっているが、湯なども喉を通らず、瀕死状態であるとする前後の文脈はほぼ同じである。

次に、中納言に対して使われたBDの用例に移る。先に登場するBについては、『大系』が「引歌があろうか」として以来、さまざまな歌が候補として挙げられている。しかし、「涙の淵に浮き沈みつつ」という下の句をもつ歌は現存するものの中には見当たらない。『桜楓』『新全集』『全注釈』の三つが、

あかずしてきみをこひつるなみだには うきしづみつつやせわ

たりつる

（『古今六帖』第四・なみだがは・紀貫之・二〇九四）[注12]

を引く。「やせわたり」が分かりづらいが、『新全集』が「八瀬渡り」と表記した通り、八つの瀬、あるいは地名としてとらえるべきだろう。涙の川の「瀬」と「うきしづみ」が縁語関係となっている。この歌以外は注釈書により挙げるものが異なるものの、まとめると次の三つである。

○『斎宮女御集』四……『新全集』『全注釈』

女御うせさせたまひてのち、さい院より御とぶらひの御かへりに　さい宮

・影みえぬ なみだのふちの ころもでにうづまくあわのきえぞしぬべき

○『肥後集』一八六……『新全集』『全注釈』

・たまさかにあふせはなくてみなのがは なみだのふちに しづむこひかな

○『元真集』二六八……『新全集』

・きみこふとわれぞなかれていはるべき なみだのかはの うきしづみつつ

語句が完全に一致するものはないけれども、和歌史においては類型的な発想であることがわかる。最初の歌は「淵」に「藤」をかけ、「涙の淵」「藤の衣」と続ける。喪服の意である「藤衣」は「涙」とともに詠まれるのは当然といえる。『肥後集』では「逢ふ瀬」がなくてあるのは「淵」ゆえ、その「淵に沈む」とするもので、「川」を軸に対となる「瀬」「淵」の縁語仕立てである。『元真集』では、「泣かれて」に「流れて」を掛け、「川」「浮き沈み」の縁語からなる。ただし、ここで注意しておくべきは「涙の川に浮き沈み」ではなく「涙の川の浮き沈み」とある点であり、「の」ゆえに「浮き」に「憂き」が読み取りやすくなっている。[注13]こうした「浮き沈む」の歌が成立する前段階として、勅撰集にも採られた以下のような用法があった。

かにはざくら　　つらゆき

・かづけども浪のなかにはさざられで風吹くごとにうきしづむたま

（『古今集』巻十・物名・四二七）

女三のみこに　　あつよしのみこ

・うきしづみふちせにさわぐにほどりはそこものどかにあらじとぞ思ふ

（『後撰集』巻十四・恋六・一〇二七）

これらの「浪・淵・川―浮き沈む」の縁語表現と「涙の淵・涙の川」という比喩的表現が結びつくことで「涙の淵・涙の川」に「浮き沈む」という表現が成立したと考えられる。[注14]以後、「橋」「渡る」「流る」らとともに縁語仕立てで詠まれるようになるのは、和歌的な発想として自然なことであろう。諸注釈書の指摘した歌以外にも、

をとこ

・忍びつつながきよすがら恋ひわびて 涙の淵と うかびてぞぬる

（『本院侍集』一七）

・やつはしのくもでにものをおもふかなそでは なみだのふちと なしつつ

（『好忠集』四二三）

しりて侍る人の、あからさまにほかへなむわたるとはましながら、

そのところとはしらせねば、たづねてつかはしし

・わたるらんかたししらねばうきしまのうきしづみたるこひもするかな

（『能宣集』五二）

といった例もある。『本院侍従集』所収歌は、『新千載集』では忠義公の歌とされ、あとに続く一連の軽妙な恋歌の応酬の端緒となるものである。好忠詠は単に「ものをおもふ」とあるだけだが、八橋があることから『伊勢物語』東下りを下敷きにした恋の物思いであることは明らかだ。この二つは「涙の淵」の例であるが、ともに「涙の淵と」となっており、「涙が流れて、それが淵となる」ことが強調される詠みぶりである。能宣詠は「うきしまのうき」と同音反復から導かれる「浮き沈み」であり、これも「憂き」を連想させる。以上、「涙の淵」および「浮き沈む」を含む類歌を見てきたが、ただ一首の引歌を想定するよりも、「和歌的表現」[注15]としてこれらの歌との関係においてとらえておくことがやはり肝要だろう。網掛けを施したように、ほとんどが恋に懊悩し葛藤する男の心中を象徴的に示す。しかし、本稿では別な流れがあることに目を向けたい。それは『斎宮女御集』のように大切な人を亡くした悲痛さを表す系統であり、哀傷歌として深い悲しみを表す用例である。

『浜松中納言物語』に戻ると、Bの用例に関しては誰かの死が関係しているわけではなく、契ることができない吉野の姫君への恋情から涙にくれるという和歌の伝統にのっとった表現として理解できる。しかしながら、他は恋の嘆きでは済まされない不吉さを漂わせている。Aでは四十九日を過ぎてなお吉野姫君は尼君の喪失と不在の念をつのらせる姿として、Cでは「たましひも身に添は」ないほど弱り切って瀕死の状態として描出されている。また、それはEで確認したように中納言の死を危惧する涙でもあった。さらに、中納言のDでも、直前の「いとどかきくらし、たましひ消ゆる心地して」[注16]の部分、さらに夢が示す内容から唐后の死および眼前の吉野姫君の瀕死という状況を受けとめて痛切の極みにある姿を描く。また、そもそもACは吉野の姫君の様子を表しているのであって、男の恋情を述べる「あかずして」歌を引歌とみる必要はあるまい。参考とすべきは、着目した哀傷の流れにある次の歌であろう。

をさなきこなくしたる人に　大弐三位

わかれけんなごりの袖もかわかぬにおきやそふらん秋のしらつゆ

かへし

・おきそふるつゆとともにはきえもせで なみだにのみもうきしづむかな

（『大弐三位集』五八・五九／『新古今集』巻八・哀傷歌・七八〇・七八一）

大弐三位が幼い子に先立たれた人に対し、悲しみの涙で濡れた袖に露が置き加わっているかと気遣って詠んだ歌に対する返歌であり、その涙の上に加わった露とともに消え失せるように死にもせず、涙にばかり浮き沈みしているとする。この「うき」には「憂き」が響いていると見るべきで、「涙の淵」で悲痛を象徴する『斎宮女御集』所収歌と同じように、死者を悼み「消ゆ」とともに用いられている。「淵・川」といった語を省き凝縮した「なみだにのみもうきしづむ」とする点でより『浜松中納言物語』ACに近い。もちろん、哀悼の意は親愛の情なり恋情なりがあるからこそ生じるものであるし、涙の量の多さをいうことに主眼があるのだろうが、『浜松中納言物語』のAC用例は恋の訴えよりは死の悲しみを象徴的に示す哀傷歌の系譜に連なることをこそ重視すべきだろう。さらに、他ならぬ『大弐三位集』所収歌だということも重要である。詠歌者が誰であれ、大弐三位への返歌となれば、『浜松中納言物語』の作者とされる菅原孝標女は当然意識したと思われる。孝標女の大弐三位への憧れはすでに指摘されているところである。(注17)

以上、和歌との関連において『浜松中納言物語』の「涙に浮き沈む」の位相が明らかになった。すなわち、Bは恋歌、ACは哀傷歌といった系譜からなり、Bには『古今六帖』『元真集』、ACDには『大弐三位集』『斎宮女御集』の歌をその背後に想定する必要があった。ただし、Cには吉野姫君の中将への恋情を読み取ることもできるし、Dについては唐后への恋情と死の悲嘆という、どちらの要素も加わっており、截然と分類することは難しい。とはいえ、仔細に見れば、ACは尼君や中納言といった自分を庇護してくれていた者の不在を嘆くもので主体は吉野の姫君、また「副詞＋涙ばかりに浮き沈む」となっており、Aでは尼君の死後四十九日の間ずっと涙を流し、Cでも「月ごろ」「夜昼」と時間的長さが強調されていた。その点、Dだけが主体は中納言であり、長きにわたることを示す語とともに用いられることなく、前後に縁語表現があるわけでもない。

三　物語作品における「涙に浮き沈む」

いったん視点を変えて、本節では他の物語作品でどのように用いられているかを検討する。これについても中西氏がつとに指摘されていた。氏によれば、「一般に物語表現の中では少ないもので、そもそも『浮き沈む』の語にしてからが宇津保物語、源氏物語、狭衣物語、松浦宮物語に各一例、寝覚物語、とりかへばや物語に各二例がある程度しかなく「宇津保や源氏、松浦宮の例も和歌の用法」なのであった。(注18)散文で使われるのは後期物語、とくに相互の影響関係がさまざまに考えられる『浜松中納言物語』『寝覚物語』『とりかへばや』だけなのである。それらの物語文学の中での用例を和歌も含めてあげる。

a　（宰相の上から仲忠への文として）白き色紙に、
いとおぼつかなう思ひたまへらるれど、
渡り川たれか尋ねむ浮き沈み消えては泡となりかへるとも
え覚えずぞ侍る。
とも書きたまへり。

（『うつほ物語』楼の上上・四一一～四一二頁）

b1　（中納言）対に、いとわりなく紛れおはして、月ごろ思ひわづらふ心のうちを、涙に浮き沈みつつ言ひ聞かせ、明け暮れは、御文を隙なく書きおこせたまへど、……

（『夜の寝覚』巻一・七七頁）

b2　（宰相の上の嘆きを知り）我（＝寝覚の上）もげに涙に浮き沈み、一人ならましかば、つねよりも心尽くしならまし寝覚めを、慰む心地もし、あはれをも添へて、明けぬるに、……

（『夜の寝覚』巻四・三四七頁）

c　（狭衣詠）うき沈みねのみなかるる菖蒲草かかるこひぢと人も知らぬに

（『狭衣物語』巻一・三〇頁）

d1　中納言は、一筋にだにあらず、方々心得がたきことをさへとり重ね思し続くるに、夜もすがら涙の川に浮き沈み、思し明かして、

（『とりかへばや』巻四・四七四頁）

d2　（帝）「さればよ、あるやうあらんと思ひつかし、この若君はさはこの宮の御腹なりけり、あやしく母なん誰とも聞こえで、（大納言が）ただ明け暮れ涙の川に浮き沈みこれをかたはら避けず生ほしたてけると聞くは、むべなりけり、……」

（『とりかへばや』巻四・五一四頁）

aは宰相の上から仲忠への文に書かれた歌だが、そこでは「川―浮き沈む」の基本的構成からなる。dの『とりかへばや』二例も「涙の川」とはなっているが、「川―浮き沈む」である点では同じである。また、それぞれ「夜もすがら」「明け暮れ」など涙の量だけでなく、時間的な長さを示す表現を伴っている。cは、五月四日の夕方に、路上で菖蒲を売る男に託して自らの恋の苦悩を狭衣が詠んだ歌である。おそらく、「うきしづみ淵瀬ながるるもみぢ葉は深く浅くぞ色も見えける」（『伊勢集』一四六）が意識されており、[注19]その上で「うき沈み」に「憂き」がかかると考えられる。「川」が明示されてはいないが、掛詞になっている「鳴かるる／流るる」から「川―浮き沈む」の流れにある歌とみてよい。

ここで注目されるのは、b1・b2の『夜の寝覚』の用例であり、散文中での「涙に浮き沈み」という使われ方は、『浜松中納言物語』のものと近似している。「川・淵・瀬・海」などの要素を省き圧縮した定型表現として確立している点でも同じである。b1は、中納言が恋い慕っていた女が妻の妹だと真相を知った後に、中の君方を訪れ、涙ながらに訴える場面で、前掲「あかずして」歌の流れに連なる恋情を認めることができる。b2は寝覚の上が宰相中将の上と休んでいたところに、内大臣が訪れて目が覚めてしまったため二人が互いの身の上話を聞き嘆き合う場面である。女性同士の相手へのいたわりから憐憫の情を催すさまは、『大弐三位集』所収歌の流れを引くものであろう。『新全集』がそれぞれ「涙ながらに」「思わず涙ぐんで」と訳しているように、涙を流し悲しむ様子として使われているが、『浜松中納言物語』の切迫した状況でのそれとは深刻さにおいて決定的な差がある。

ともあれ、物語の散文部分での「涙に浮き沈む」という和歌的表現は、孝標女作とされる『夜の寝覚』二例と『浜松中納言物語』三例にしか見られない珍しい表現なのであった。

四　源泉としての『源氏物語』

前節まであえて示さなかった「涙に浮き沈む」のもっとも重要と思われる例を、次に示す。

（紫の上）「あはれなりし世のありさまかな」と、独り言のやうにうち嘆きて、

思ふどちなびく方にはあらずともわれぞ煙にさきだちなまし

（光源氏）「何とか。心憂や。

誰により世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙にうきしづむ身ぞ

いでや、いかでか見えたてまつらむ。命こそかなひがたかべいものなめれ。はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、ただひとつゆゑぞや」とて、箏の御琴ひき寄せて、掻き合はせすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど、かのすぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。

（『源氏物語』澪標・二九二～二九三頁）

澪標巻において、光源氏が紫の上に明石の君の存在を打ち明けた際に、紫の上が源氏に対して「独り言のやうに」恨み言を歌にした。それに対する光源氏の弁解の歌である。一首は「いったい誰のせいで、世をつらく思い、明石や須磨の方まで海山を行きめぐり、尽きることのない涙に浮き沈む身でしょうか」といった意で、ほかでもないあなたのために海山をさすらってきたのだとかわす歌となっている。「うみ」に「憂み」と「海」を掛け、その縁で「浮き沈む」が使われている。[注20]

今までこの歌が注目されてこなかった要因は、『浜松中納言物語』の用例A～Dの類似からDだけ特別に考える必要性が顧みられてこなかったこと、Dの中納言が示すその嘆きの深さと『源氏物語』の紫の上をいなす言い訳めいた軽々しさとが結びつかないため、光源氏の歌を呼び起こす必要もなくこの語だけで解釈するのに困らなかったことなどにあるのだろう。前者については二節で検証したとおり差異が認められ、Dの恋情とも哀悼ともわかちがたいさまが確認できた。後者についてはむろん、宣長のいう厳密な引歌ではなく、一見すると関わりがないように見える。[注21] しかし、本当に無視してよい歌なのだろうか。

中納言の造型に関しては、「中納言は薫大将よりもむしろ源氏に似たりと覚ゆれど、性情の描写十分ならず」[注22]、あるいは「主人公の性格造形は薫（かおる）型であり、常に通世への志を抱き、男女関係への深入りを避けるべきものとしているが、筋立てでは光源氏の立場でもある」[注23]といった指摘がある。こうした人物造型以上に、より根本的に、超自然的事件や夢告などが重要なモチーフとなっている『浜松中納言物語』と『源氏物語』須磨・明石巻の共通性は明らかである。

語句の合致についても『古今六帖』の「あかずして」歌は「浮きみ沈みみ」と異文があった。また『元真集』「涙の川のうき」や『能宣集』「うきしまのうきしづみ」などのように「憂き」を喚起しやす

いつながりでもなく、「涙に浮き沈む」と続ける圧縮されたもの言いは『源氏物語』がもっとも一致している。

さらに、この光源氏歌は「涙に浮き沈む」の例としては当然『大弐三位集』よりも古い。その『大弐三位集』所収歌も詠歌者が、深い同情といたわりを寄せてくれた感謝を表すために、大弐三位の母紫式部への敬意を込め『源氏物語』の語を用いた可能性が高い。その点も考慮し定家は『新古今集』に採ったのだろうし、現代の『新古今集』諸注[注24]も光源氏歌を参考として挙げるのだろう。つまり、『浜松中納言物語』の『源氏物語』受容の観点からも、「涙に浮き沈む」という語句の一致度からも、『大弐三位集』の『源氏物語』摂取の観点[注25]からも、「涙に浮き沈む」という表現は、この光源氏詠をこそ真っ先に思い浮かべるべきものであったのだ。

確かに『浜松中納言物語』末尾は「この歌に寄らで[注26]」解釈できない語彙ではない。引歌表現が典拠を踏まえて初めて解釈可能になるものとするなら、「涙に浮き沈み給ひけり」はこの表現だけで自立し文意が通じる。しかし、散文中の用例はもちろん、和歌の表現としても「涙に浮き沈む」はこれまで検討してきたとおり、決して用例が多いものではなく、『源氏物語』と『浜松中納言物語』の関係を考えれば、この光源氏詠とのつながりをより丁寧に探ってみるべきなのである。

澪標巻の場面全体の枠組み、つまり女性の嫉妬をなだめる男性という構図自体は、一人涙にくれる『浜松中納言物語』巻末とは結びつかない。しかし、その歌と詠歌主体のあり方に焦点を絞ってみると、共通性が浮かび上がってくる。他の誰でもない紫の上を思いつつ須磨・明石を流離し、「涙に浮き沈む」と詠む光源氏の姿は言い訳がましさを伴うゆえ、中納言の絶望とは一見程遠いように思われるけれども、その光源氏の訴えには真実が含まれているのではないか。須磨・明石の地での悲惨な流寓の生活を送り、愁いと涙にくれる様子は物語がつぶさに描き出していたところである。歌が示す男の姿は、『浜松中納言物語』全体を通して「海山を行きめぐり」「涙に浮き沈む」中納言と確かに通じるものであった。

紫の上への甘えともとれる光源氏の「涙に浮き沈む」から『浜松中納言物語』のそれへの「変換」を可能にしたのが、先に見た同時代の「涙に浮き沈む」だったのではないか。つまり、この「涙に浮き沈む」は『源氏物語』に由来する語であるが、一方で同時代、狭めれば孝標女周辺で死を悼むような悲嘆を象徴する語句として捉えられ、哀傷にも使える意味の広がりを有していたと考えられる。和田律子氏は「同時代の新鮮な歌ことばにも配慮する作者の創作姿勢」や「『源氏物語』を知悉し、文化の流行に敏感であった同時代の読者の興味を意識して用いられた歌ことば[注27]」の使用を孝標女に見出しておられる。『更級日記』研究のこれらの成果をふまえ、『源氏物語』のことばに『大弐三位集』所収歌の意味が付加されたのが『浜松中納言物語』の「涙に浮き沈む」だと考えることは十分可能だろう。いわば、両系統の結節点としての用例である。『浜松中納言物語』の末尾において「涙に浮き沈む」という行為を引き起こす要因は唐后の死であり、哀傷を示す参考歌として『大弐三位集』とつながる一方で、「涙に浮き沈む」の主流である伝統的な意味、すなわち光源氏歌にも通じる恋ゆえの憂愁を背後に忍ばせるのである。ACは主体

が女性なこともあって『大弐三位集』を想定するだけで十分解釈可能だが、Dはその『大弐三位集』が拠った『源氏物語』にまで戻ることでより理解が深まるのではないか。

以上のことは、「はじめに」で引用した「『浜松中納言物語』の本質―盈満のなかの欠落―」の「あやにくな恋の嘆き、といった甘美な感傷性をその底に湛え」つつ、「深刻な絶望とは言えないまでも、ある種の哀愁が漂っている」という指摘がなされる所以を歌ことばの歴史から明らかにしたことになろう。

五　光源氏歌を通して結びつく物語の断片

それでは、光源氏詠と重ねて『浜松中納言物語』の「涙に浮き沈む」を読むことで、どのような読みの可能性が生まれて来るのか。まず、先にもふれたように、この語句の照応は、涙にくれる主人公像として光源氏と中納言を結びつける。[注28] 光源氏の「涙に浮き沈む」が紫の上への恋情に起因するものであり、『浜松中納言物語』におけるそれは、唐后への恋情ゆえの哀傷になっているものの、ともに「涙に浮き沈む」という点で二人の男主人公は同様であった。末尾の「涙に浮き沈み給ふ」中納言の姿は「いったい誰のせいでこの世をつらく思い、海山を越えて、絶えることのない涙にくれる我が身なのか」という光源氏のことばを愚直に生き直してしまったものとしてある。須磨・明石の流離を経て、京での栄華への道が開ける光源氏とは違って、最後まで官位すら変わらない中納言[注29]は、まさに光源氏が紫の上をいなすために呟いた歌を、「海山をめぐ」ること自体が大切であるかのように実践した。大君への恋情から始まった物語は、物語の進行に伴い唐后への思いとして収斂する。

加えて、この光源氏歌と『浜松中納言物語』とのつながりは「涙に浮き沈む」部分だけではない。初句「誰により」は、現存巻一の次の和歌でも使われていた。[注30]

大将殿の姫君、いみじくもの思へるさまにながめおぼし入りたるかたはらに寄りて、われも心に離るる世なきかなしさを言ふとおぼすに、うち泣きて、

たれにより涙の海に身を沈めしほるるあまとなりぬとか知る

とのたまふを、いみじうあはれに、われとほろほろと泣くと思ふに、涙におぼほれて、うちおどろきぬる名残、身に添へる心地して、かうはるかに思ひやるとならば、おほよどにてもあらず。思ひやりなうけ近う見なして、ほどなくはるかになりにしを、いかにおぼすらむ、と思ひやる涙は、うつつにもせきやるかたなくて、

日本の御津の浜松こよひこそわれを恋ふらし夢に見えつれ

（巻一・五二～五三頁）

巻一のこの時点では、むしろ大君の形代的存在として唐后が描かれており、唐后のために海を渡ったわけではなく、あくまで転生した父に会うための渡航であったわけだが、物語の行き着いた地点から見れば、この渡唐も「唐后物語を導くための設定」[注31]と言えよう。

しかし今は、その位置づけは措く。ここで確認しておきたいのは、当初のヒロイン大将姫君の一首が、題名「御津の浜松」を含む歌を導き出す端緒となっていることであり、その歌は物語にとってもっとも重要な歌の一つであることだ。その大将姫君歌が光源氏歌と「たれにより」「涙」「海」「沈」「身」の五語が重なるのだ。「たれにより」の句を持つ歌は平安時代にも次の八例しかない。

東三条院御四十九日のうちに、子の日いできたりけるに、宮の君といひける人の許につかはしける　右衛門督公任

・たれにより松をもひかん鶯のはつねかひなきけふにもあるかな

（『拾遺集』巻十六・雑春・一〇二二）

・たれによりおもひみだるるこころぞはしらぬぞひとのつらさなりける　（『亭子院歌合』躬恒・五三／『続古今集』『古今六帖』）

・たれによりいのるせぜにもあらなくに浅くいひなせおほぬさにはた　（『源順集』一八）

・たれによりなげくとかみるかまどやまえもとりあへずまどふこころを　（『源順集』一〇五）

ほりかはの中宮うせ給ひてのころ、

六条殿にながめがはしはをたてまつり給ひて

・さだめなきよをきくときもたれによりながめがしはのしげきとかしる　（『斎宮女御集』二二六）

・たれによりひとつおもひにみをすててことしもなつのむしとなりしぞ　（『陽成院歌合』八）

・たれによりこるなげきをかうちつけにになひもしらぬ我におほする　（『平中物語』一四）

・神よりもきみはけたなんたれによりなまなましみのもゆるおもひぞ　（『平中物語』六〇）

『拾遺集』公任の哀傷歌や『斎宮女御集』のような弔問の歌にも用いられているが、「涙」あるいは「沈め」の語を共有するものは他にない。大将姫君歌と光源氏歌とのむすびつきを偶然ととらえるべきではなかろう。現存巻一から意識されていたのである。

また、かつて三角洋一氏は「海山」を例に『更級日記』の源氏語を考察された[注32]。氏が「海山」を源氏語とするのは、『竹取物語』や『うつほ物語』にみられた漠然とした地方ではなく、『源氏物語』と深く通底する「海山」と感じられるからだろう。「孝標女はけっして源氏語をもてあそんだのではない。『源氏物語』からものごとの考え方や人生の知恵も学んでいる」とされた。その「海山」は『源氏物語』に三例しかなく、若紫巻、明石巻、そしてこの澪標巻のみである。すべてが、須磨・明石を想起させるものであることから、「海山」には源氏の試練の場所としての須磨や明石のイメージが内包されていると言える。

一方、『浜松中納言物語』にも「海山」を隔てた唐への渡航は、以下のように描出されていた。

・（中納言）やうやうしづまりて、ふるさとおぼしやるに、雲霞はるかに隔てて、海山を分け過ぎにけるにつけても、人々のおぼしたりしさまどもの、あはれにかなしけれど、いつしか三の皇

子、とく見たてまつらむと思ふにぞ、よろづなぐさみ給ふ。

（巻一・三三頁）

・（中納言）多くの海山を隔てて、（唐后と）契りを結びたてまつりて、燃えわたる胸の炎、さむることには、ただこのこと（＝吉野姫君のこと）を片時おこたらずおぼしいとなみても、逢ふ道ならねば、何のしるしもなかりけり。（巻三・二六三頁）

最初の例は、唐に到着し次第に心も落ち着いてきた中納言が、雲霞をはるかに隔てて海や山を分け過ぎてきたことにつけ、別れを惜しみ前途を心配してくれた人たちのことを思う場面である。この時点では、唐帝の第三皇子に会うことが目的とされていたわけであるが、当然新しい展開が期待されるところである。二つめでは、多くの海山を隔てて、唐后と契りを結び申し上げて燃え続ける胸の炎は、吉野姫君のことを世話しても静まらないとされる。転生した父に会うため海山を越えたはずが、いつのまにか海山を隔てて唐后に恋をする中納言にずらされ、最終的には海山を越えて成就した恋へと定位されてきていた。物語が導こうとしている世界が明らかだろう。「海山」ではないが、そのような中納言の思いは次のように詠まれている。

（中納言）心のうちは、片時も忘れまぎるる折なく、心にしみて思ひ出でらるるに、苦しきまで思ひわびぬ。

荒かりしおほくの波にそぼち来て恋の山路にまよふころかな

（巻一・七三〜七四頁）

唐で逢った女のことばかり考え思い沈む中納言の歌で、「波」にぬれ海を越えて「恋の山路」に迷いこんだとする。これは、後に再び海山を越えて故国で「恋の山路」に踏み入れる中納言の姿を先取りするものでもある。

このように光源氏歌の「誰により」「うみやまに」「涙にうきしづむ」の三つの語は、『浜松中納言物語』においてそれぞれ要所に配置されていた。

以上のことを押さえた上で、あらためて『浜松中納言物語』末尾から光源氏歌を眺めると、その歌はあたかも中納言の歌であるかのような様相を呈してくる。――いったい誰のせいで世をはかなみ、「海山を行きめぐり」、唐后・尼姫君・吉野の姫君ら女性と関わってきたのか、そして絶えることのない多量の「涙に浮き沈む」我が身なのか。――他の誰でもない紫の上を思いつつ須磨・明石を流離したと詠む光源氏の嘆きが海山をめぐり他ならぬ唐后を思い続けた中納言の嘆きへと読み替えられ、大将姫君への恋情から始まった中納言の恋も唐后への思いへと収斂する。すなわち、末尾の「涙に浮き沈み」は光源氏歌によって、中納言の人生の彷徨を照らし返す語句として機能し、この物語全体を終末から照射する。

六　おわりに

『源氏物語』が拡張した和文の語彙体系を、『浜松中納言物語』作

者は所与のものとして有し、ときにはその意味を更新したり刷新したりしながら、物語を紡いでいく。『源氏物語』を深く詠み込んだがゆえに、同時代的な歌ことばなどによって意味が更新されていたとしても、その語彙には『源氏物語』の痕跡が残る。『新全集』頭注に見られる多くの『源氏物語』引用がそのことを如実に示す。とはいえ、『源氏物語』の語彙がそのままの意ではないこともある。とくに、和歌的表現とされるものは、幾重もの意味が重ねられ重層的な意味をもち、それゆえ多義的になっていく。だからこそ、そうした認識の上にたって、そのたびごとに繊細に物語のことばを読んでいくことで、作品世界の理解が目指されるべきなのだろう。

こうした観点から、「涙に浮き沈む」という一語をめぐって『源氏物語』をはじめとする物語作品や和歌におけるつながりを見てきたわけだが、従来見過ごされてきたこの和歌的表現への注目から、作品内部の、あるいは作品間の連関が浮かび上がった。「涙に浮き沈む」という形は、「涙の淵／川に浮き沈む」や「涙に沈む」や「涙に浮く」といった表現から発展した表現であり、用例数も少ない。その数少ない例の中で参考歌とすべきは、『大弐三位集』、『源氏物語』澪標巻の歌であった。

『浜松中納言物語』末尾において、澪標巻の光源氏歌という補助線を引くことで、この歌の語句と一致する物語内のことばが相互に結びつき、共鳴する。従来、語句の一致などから場面の引用を通じて人物造形や主題の連関に向かう引用論が多かったが、ここでは歌一首が新たな物語を創造する構成の型として機能している可能性を考えてきた。

結果として、物語構造的にはこの一首と『浜松中納言物語』における中納言のありようとが相似形をなす。『源氏物語』では明石巻につづく澪標巻において朱雀院の退位、冷泉院の即位、源氏の内大臣昇進、明石上女子誕生といったことが次々と語られ、新生源氏の誕生とともに、この歌により紫の上との物語に接続が果たされ、流離の物語が終わる。『浜松中納言物語』も足早に各人物に決着を与えてまさに閉じられようとする、その最後のことばが「涙に浮き沈む」であるのは、中納言の国内外への遍歴を語ってきた物語の末尾としていかにもふさわしいものであった。

※　本稿で利用する『浜松中納言物語』の諸注釈書は以下の通り。

『新註』　→宮下清計氏『新註国文学叢書浜松中納言物語』（講談社、一九五一年）

『大系』　→松尾聰氏『日本古典文学大系77篁物語・平中物語・浜松中納言物語』（岩波書店、一九六四年）

『桜楓』　→久下晴康氏『浜松中納言物語』（桜楓社、一九八八年）

『新全集』→池田利夫氏『新編日本古典文学全集27浜松中納言物語』（小学館、二〇〇一年）

『全注釈』→中西健治氏『浜松中納言物語全注釈　上巻・下巻』（和泉書院、二〇〇五年）

『校訂』　→須田哲夫氏・佐々木新太郎氏『校訂浜松中納言物語』（勉誠出版、二〇〇五年）

『一言抄』→辛島正雄氏『九州大学人文学叢書8御津の浜松一言抄』（九州大学出版会、二〇一五年）

注

1 物語本文の引用はすべて新編日本古典文学全集による。和歌の引用は『国歌大観』による。どちらも一部本文を改めた箇所がある。

2 非完結説（柿本奨氏「更級・浜松・寝覚とその浪漫的精神」（『国語国文』、一九三八年八月）もあるが、とらない。

3 石川徹氏『王朝小説論』（新典社、一九九二年）。

4 星山健氏「『浜松中納言物語』、唐后転生を待つもの」（『中古文学』九一号、二〇一三年五月）。

5 『一言抄』は「この一文のあとには、間近に迫った唐后の再誕、それと引き換えの吉野姫君の死、大厄を迎える中納言の運命と、次々に難問が発生するはずであるが、すべては語られぬまま、際限なく読後の妄想を刺激する、空前の幕切れ」とする。注3、4の論文の他に、中西健治氏「浜松中納言物語巻五末尾攷」（『平安末期物語攷』勉誠社、一九九七年）、神田龍身氏『物語文学、その解体』（有精堂、一九九二年）、野口元大氏『王朝仮名文学論攷』（風間書院、二〇〇二年）、鈴木泰恵氏「『浜松中納言物語』恋の文模様」（『狭衣物語　文の空間』翰林書房、二〇一四年）、井上新子氏「『浜松中納言物語』・『狭衣物語』の終幕」（久下裕利氏編『源氏以後の物語を考える』新典社、二〇一二年）など。

6 『一言抄』のみ「『御津の浜松』の最後は、意外にも、素直な表現で閉じられている」とし、物語内および『今とりかへばや』の類似表現を挙げる。

7 注5の中西論文、初出は一九八五年五月。

8 『研究ノート』九号（日本女子大学国語国文学会、一九八一年二月）、この論では中納言の意識から由来を分析するが、本稿では歌ことばの内実として分析を試みる。

9 小学館、二〇〇六年。

10 『一言抄』が「〈心〉が激しく動揺すると、〈魂〉が身体から遊離し、その結果、身体に甚大な影響が出て、生死にかかわる事態となる」と、心と魂のありようを明確に定義づける。

11 『全注釈』のみ注を付す。A「吉野姫君はただひたすら涙に浮き沈み悲嘆にくれるばかりですっかり時を過ごしていた。すぐ後にも「涙に沈むより外の事おぼえで過ごし給へる」とある。「浮き沈む」は浜松に四例あり、そのうち二例（この例を含む）は吉野姫君、他は中納言が悲嘆にくれる場面に用いられている。／C「『しおり』は古今六帖・第四・なみだがは・二〇九四・紀貫之「あかずしてきみをこひつるなみだにはうきしづみつつやせわたりつる」を引歌とする」。久下裕利氏・横井孝氏・堀口悟氏編『平安後期物語引歌索引』（新典社、一九九一年）によれば、『浜松中納言物語のしおり』はBCDに「あかずして」歌を引歌としている。

12 萩谷朴氏『平安朝歌合大成　増補新訂』（同朋舎出版、一九九五年）によれば、〔寛平五年九月以前〕皇太夫人班子女王歌合には「あかずして君を恋ひつる涙にぞ浮きみ沈みみやせわたりける」とある。

13 「いつとだにあふせをたのむ物ならばなみだの川のうきもわすれん」（『言はで忍ぶ』一一二）といった用例もある。

14 「涙」と「浮く」「浮かぶ」を含む歌において、通常浮くのは枕であり（「ひとりねのとこにたまれるなみだにはいしの枕もうきぬべらなり」『古今六帖』、「涙河水まさればやしきたへの枕のうきてとまらざるらん」『拾遺集』など）、涙の中に我が身が浮くほど泣くという表現は少ない。ただし、少ないとはいえ、次のような例もある。「篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ」（『古今集』巻一一・恋一・五二九）「あふ事も涙にうかぶ我が身にはしなぬくすりも何にかはせん」（『竹取物語』帝）。いずれも誇張の度合いが激しく、縁語関係があって初めてその表現が成り立つものである。さらに、物語の散文部分に織り込まれ内在化した用法は以下のものぐらいである。「（定子）つゆ物もきこしめさで、ただ夜昼涙に浮きてのみおはしませば」（新全集『栄花物語』かかやく藤壷）。

15 片岡利博氏『異文の愉悦　狭衣物語本文研究』（笠間書院、二〇一三年）は「引き歌表現」と「和歌的表現」を区別すべきと提言する。

16 横溝博氏「『浜松中納言』吉野姫の〈内〉と〈外〉」（『平安朝文学研究』復刊第五号・一九九六年一二月）に「女君の死に瀕した病臥を前にしての〈見る者〉の魂のありようについては、『源氏物語』総角巻における大君を見る薫」と通ることが指摘されている。

17 伊藤守幸氏『更級日記研究』（新典社、一九九五年）、福永俊幸氏「『更級日記』と物語創作―記されない意味―」（和田律子氏・久下裕利氏編『更級日記の新研究　孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年）、福永俊幸氏『更級日記全注釈』（角川学芸出版、二〇一五年）、和田律子氏「『更級日記』の歌ことば」（福家俊幸氏・和田律子氏・久下裕利氏編『更級日記の新世界』武蔵野書院、二〇一六年）など。

18 注5の中西論文。

19 後藤康文氏『狭衣物語論考　本文・和歌・物語史』（笠間書院、二〇一一年）。

20 新潮日本古典集成版は「涙」に「なみ」を掛けた「海―浪」の縁語関係も指摘する。

21 陣野英則氏『源氏物語―女房・書かれた言葉・引用―』（勉誠出版、二〇一六年）が指摘するところの「『引用』とは呼びがたいような『引用』」と考えている。本稿は古注釈を手がかりにできなかったが、氏の論から学ぶところが多かった。

22 藤岡作太郎氏『国文学全史2平安朝篇』（東洋文庫、一九七四年、初出は一九〇五年）。

23 池田利夫氏『更級日記　浜松中納言物語攷』（武蔵野書院、一九八九年）。

24 田中裕氏・赤瀬信吾氏校注の新大系版（岩波書店、一九九二年）、峯村文人氏校注の新全集版（小学館、一九九五年）、久保田淳氏『新古今和歌集全注釈』三（角川学芸出版、二〇一一年）など。

25 中周子氏「大弐三位賢子の和歌における『源氏物語』享受の一様相」（『和歌文学研究』七九号、一九九九年一二月）、「平安後

期和歌における源氏物語受容」（『源氏物語の展望』六輯、二〇〇九年）など。

26 『源氏物語玉の小櫛』湖月抄の事（『本居宣長全集』四、筑摩書房、一九六九年）。

27 注17の和田論文、また同氏「『源氏物語』から『更級日記』へ」（原岡文子氏・河添房江氏編『源氏物語　煌めくことばの世界』翰林書房、二〇一四年）にも頼通文化世界における歌ことばの分析がある。

28 注5の井上論文は「何にかはせむ」を鍵語として『竹取物語』との関係を考察し、翁としての中納言を読むが、本稿では「涙に浮かぶ」帝とのつながりを重く見たい。

29 菊地仁氏「浜松中納言物語の在唐巻―源氏物語からの照射―」（『国学院雑誌』、一九七八年三月）。

30 中西健治氏「浜松中納言物語の題名」（『浜松中納言物語論考』和泉書院、二〇〇六年）は、この大君の歌を詳細に分析し源氏歌にも触れているが、直接の影響関係への言及はない。「たれにより」を含む歌について「単なる疑問の形ではなく、それを通して、誰でもない、他ならぬあなたであるということを強く押し出す意図を表現していることが多い」とまとめる。

31 戸叶信枝氏「浜松中納言物語に関する考察―夢と主題―」（お茶の水女子大学国語国文学会『国文』三九号、一九七三年九月）。

32 『王朝物語の展開』（若草書房、二〇〇〇年）。『更級日記』における『源氏物語』引用については、西田友美氏「更級日記の表現と方法―源氏物語引用をめぐって―」（『国語と国文学』、一九九四年一〇月）など。『更級日記』におけるもっとも明確な『源氏物語』引用元として澪標巻がある。

（ほさか　さとし・北海商科大学講師）